

ていると唱える (p. 232)。最終的に、教育政策の動きと女性の「自律的な生への希求」が複雑にからみ合うことで、マーレ社会において、既婚女性を含めた女子教育が普及したと結論づけている。

以下では、評者として本書の気になった点を挙げてみたい。第一に、アフリカにおける女子教育を「関係の自律性」から捉える視点は、これまで抑圧された対象としてみられてきた女性を捉え直すことに繋がるだろう。この点において学術的貢献が大きいだろう。それと同時に、筆者が主張するマーレ女性の自律性では、必ずとも「愚か」でいなければ自律性は保たれないのだろうかとの疑問が浮かぶ。これから学校に通う女性、「学んだ人」が増えてもなお、社会的に女性は脆弱な立場は続くのだろうか。第3章でこれからの就学の変化が指摘されているように、マーレ社会における学校教育の揺らぎのなかで、同社会の文脈において女性の自律性がいかに変容していくかは、今後の課題である。第二に、筆者は「学校に通うこと・学ぶこと」に価値が置かれていると述べるが、学びの場は学校に限定されず、日常生活にも存在するはずである。なぜ、「学校」でなければならないのか、より具体的な議論が望まれる。最後に、結婚・出産を経験した女性が学校教育を積極的に継続できるという点は大変興味深い。就学希望が叶うためには学校側の体制や家庭の支援が不可欠であり、マーレ社会にその環境が整っていることは注目に値する。もっとも、「学校に通うこと」を家父長制的社会構造への抵抗とみなす議論 (p. 222) には慎重さが

求められる。なぜなら、少女や母親が学校に通うことによって免れる家事・育児は、義母や年少の子どもといった他の女性に委ねられているからである。この点は、「抵抗」が同時に家父長制の再生産に寄与する可能性がある。このようなある女性の「抵抗」が別の女性（女子）の負担に支えられるという二重性をどう捉えるかは、今後の教育とジェンダー研究にとって重要な課題である。本書は、ライフストーリーという女性たちの分厚い語りという詳細な記述とコラムにより、読み進めるとフィールドにおける生活が目につく。だからこそ、彼女たちの語りが、問いに対して、はっきりとした答えがない場面がある。その曖昧さこそが、現地における複雑さを表しているといえる。結婚や出産を経験した女性が学校に通うという現象を丁寧に取り出し、教育の多義性と女性の自律性を浮かび上がらせた本書は、教育研究者、ジェンダー研究者、地域研究者に是非一読してほしい民族誌であり、今後のアフリカ地域研究における女子教育論の重要な参考となるだろう。

師田史子. 『日々賭けをする人々—フィリピン闘鶏と数字くじの意味世界』慶應義塾大学出版会, 2025 年, 392 p.

劉 振業 *

本書は、著者によるフィリピン南部・ミンダナオ島の人々（「賭博者」）の日常的賭博実践を繊細に記述したものである。闘鶏と数字

* 立命館大学環太平洋文明研究センター

くじに興じる「スガロル (*sugarol*) = 賭博者」たちが、賭け=不確実性の世界と自らを有機的に結びつけ、生を彩っていくあり方を鮮やかに描き出している。

賭博は、射倖性に駆られて破滅へと至る危うい営みとみなされがちであるが、本書が問うのはその表層ではない。人々はなぜ賭けるのか、賭けに没頭することでいかなる世界を構築しているのか。日常に賭博が充満する社会のなかで、人々が賭けに意味を見出すその過程こそ、本書の主題である。

序章では、本書における賭博の捉え方が提示されている。賭博とは、もともと吉兆を占ったり神託を得るといった、人間の「不確かな未来をどうにかして知りたい」という欲望から生まれた原初的な型である (p. 3)。しかし、後期近代の消費社会の興隆に伴い、「病的賭博」という概念が生まれ、賭博を非合理的かつ望ましくない社会悪として捉える視座が形成された (p. 10)。本書はこの前提から距離を取りつつも、機能主義的な解釈に回収されるものではなく、賭博を賭博者の内在的行為として捉え、「賭博そのもの」として論じる (p. 12)。そこから浮かび上がるのは、世界の稠密なシステム化=脱色の精神と一線を画す「彩色の精神」である (p. 7)。

第1章と第2章では、ミンダナオにおける調査の概要と、フィリピンにおける賭博の歴史的変遷が描かれる。著者は、ムスリム―クリスチャン関係などを扱う主流の「ミンダナオ研究」とは異なり、人々のとりとめのない賭博実践に焦点を当てる (p. 43)。調査の最大の特徴は、著者自身が「ただの1人の

賭博者」として現地に身を置いた点である。また、スペイン植民地期から現代に至るまで、賭博は国家権力のもとで合法化と取締を繰り返し、社会悪から国家を潤す手段へと変化してきた (p. 58)。

第3章と第4章では、賭博をめぐる法制度と道德の関係が論じられる。近代国家による賭博の管理は、遊戯に「合法/違法」の境界を引き、道德の毀損を防ぐことを目的のひとつとしている (p. 87)。しかしミンダナオの人々にとって、賭博の善悪の概念はこうした国家的な枠組みから大きな影響を受けていない。違法賭博が「土着の秩序の中」 (p. 91) で生き延びているのは、現地の市井のネットワークを基盤に、公権力とのあいだで多彩な立ち回りが可能だからである。すなわち、ここでは「違法=非道德」ではなく、人々独自の価値基準が賭博の実践を方向づけている。

その価値観の構造を著者は、①善悪の境界線「ライン (*lain*)」②富の分かち合い「バラト (*balato*)」③「都合の良い」神の3点に整理する。ラインは「違う」「異なる」を意味し (p. 115)、依存的な賭博行為のように過度な熱中を否定する線引きを示す (p. 120)。バラトは勝ち金の分配であり、元手以上に得た金を「風の金 (*kwarta sa hangin*)」として他者と分かち合うことが推奨される (p. 127)。また、宗教的規範は存在するが十全に機能せず、神は「都合の良い存在」として経験的現実のなかに現れる (p. 145)。こうした倫理と秩序の交錯のなかで、本書は次章以降、闘鶏と数字くじの実態を描く。

第5章と第6章では、フィリピンにおける闘鶏の構造と実践が描かれる。闘鶏は単なる賭博ではなく、「伝統」や「ナショナル・スポーツ」として位置づけられており、これを「ディープ・プレイ」の視点から社会的機能や象徴の意味で論じる研究も多い。しかし著者はあえて、「リアルな」闘鶏＝「シャロー・プレイ」に注目する（p. 158）。本章では闘鶏の仕組みと諸アクターを概観し、人間と鶏の双方の視点から、鶏が「動物」から「戦士」へと作り変えられていく過程を描く。そこから浮かび上がるのは、近代資本主義的世界に埋め込まれた「人間—鶏」という人間中心の関係である。鶏を育成する闘鶏家（ハンドラー）は鶏に名をつけず、一定の距離を保つ。この「深くなりすぎない」関係は、喪失への身構えであり、賭博における獲得と喪失のリズムと共鳴している（p. 199）。

闘鶏賭博では、人々は経済合理的思考、科学的見解、伝統的信仰、呪術的信念など複数の知のレイヤーを相互参照しつつ賭けに臨む（p. 202）。著者はこの流動的な賭け方を、「ビジネス・マインドの賭け」「鶏の強さを判断する賭け」「不運を制御する賭け」の三類型に整理する。「一度勝った色はその日勝ち続ける」（p. 219）という言明にみられるように、ファイトと賭けの連続性が「賭けのリズム」を形成する。だが、人々は必ず「負け」に直面し、連敗が起きると「マラス（*malas*）」＝不運によってそれを説明する。闘鶏は知識であり運の賭博でもあり、人々は不運を避けたり「使い切る」で制御を試みる。それでも放たれた鶏は完全なる他者として現れ、その

闘い＝現実とは人間の予測を裏切る（p. 242）。この不可知性こそが、人々を闘鶏場に耽溺させるのである。

第7章と第8章では、数字くじ「ラストトゥー」をめぐる人々の賭けの実践と思考が描かれる。ラストトゥーは00から99までの2桁の数字を当てる単純な賭けで、闘鶏のような派手さはないが、人々の日常生活に深く浸透している。一見「つまらない賭博」に見えるが、その面白さは偶然的な賭けに自律的関与の余地が作り出される点にある（p. 282）。人々は過去の当せん番号を参照するだけでなく、カレンダーや葬式、車ナンバーなど日常の数字と邂逅しながら賭ける数字を選び、自らの生活環境のなかに数字の意味世界を構築している。この恣意的な根拠づけを通じて、ラストトゥーは「つまらない賭博」から「面白い賭博」へと変貌し、人々は幸運を狩りたて、偶然の瞬間と交差している（p. 286）。

さらに、人々が「1%しか勝てない」と知りつつも賭け続ける思考が分析される。心理学的には「賭博者の誤謬」や「制御幻想」とされるが、著者はこれを「数字との邂逅」によって説明する。すなわち、当せんの客観的確率「100分の1」は邂逅によって希薄化し、当せんは「100分の1」という数値ではなく、現実空間（アクチュアリティ）における「2分の1（当たるか、当たらないか）」の事象として受け取られる（p. 307）。著者はこの思考の流転を「賭けの現実性への接近」と呼び、数字を介して偶然を現実に変換していく人々の姿を浮かび上がらせる（p. 312）。

終章では、賭博者が紡いだ賭博の意味世界が振り返られる。世界と相関し続ける賭博者は、数字の徴を読み解き、鶏の強さを多角的に判断する思索の果てに、自らの関与が及ばない領域（現実）に賭けを放つ（p. 319）。知を詰め込んだ賭けが最も簡単に裏切られる瞬間にこそ、賭博者はその不可知な現実に触れようとする（p. 321）。賭博とは、特異的な現在を意図的に設定し、そこで生起する事象の現実性を感じ取る行為である（p. 322）。「彩色の精神」のもと、賭博者的な生とは、驚きと不思議をもって世界を捉え、生活を面白さで満たす営みである（p. 328）。

各章には独自の視点と知見があり、重要な考察を提供している。理論的展開もさることながら、闘鶏や数字くじの事例描写には強い臨場感があり、登場人物や鶏たちが紙面上で躍動している。また、「彩色の精神」という概念装置は、近代的合理主義への批判的視座としても意義深い。何よりも、賭博実践を社会構造や機能主義的思考に単純に還元せず、人々の日常的な賭けのなかにその魅力を見出し、丹念に掘り下げている点で際立っている。この点で、本書は賭博研究における貴重な成果として高く評価されるべきである。そのうえで、以下では気になった点を3つ挙げておきたい。

1点目は、「彩色の精神」や「賭けの現実性」といった独自概念を用い、人々が賭博を通じて世界と交わる仕方を詩的かつ理論的に描き出す一方、賭博の金銭的構造が後景化している点である。著者は「風の金」「バラト」など賭け金のやり取りを丁寧に記述するが、

金銭が「賭けを賭けたらしめる媒介物」としての構造的次元は十分に展開されていない。たとえば著者が第7章で援用するカイヨワ（Caillois）の「アレア（alea）」概念（p. 253）は偶然に支配される遊びの類型として有効だが、「遊び」と「賭博」には決定的な非対称性がある。賭博者は「遊び」の形式を通じて現実の価値秩序に身体ごと参入している。著者の議論が「驚愕」「彩り」といった経験の詩学に傾く一方で、その根底にある経済的交換・損失・獲得といった現実的契機は相対的に後景化している。この点を踏まえると、賭博は「遊びの延長」ではなく、金銭を賭けることで開かれる現実との関係として捉える視点が有効であろう。

2点目は、人々の情動的経験を鮮やかに描き出しながら、その情動がいかに関係し社会的に共有されるのかという過程が理論化されていない点である。本書では高揚や驚愕、憤り、喪失といった感覚的強度が印象的に描かれるが、それは叙述の水準にとどまる。近年の情動人類学では、感情を身体・もの・空間を媒介して生じる関係的運動として捉える[e.g. Massumi 2002; 箭内・西井 2020]。この視点を踏まえれば、「驚愕」や「彩り」も単なる心理的反応ではなく、闘鶏場の熱気や観衆の声、数字くじの紙の手触りや筆圧など、物質的要素を通じて立ち上がる感情の出来事として再考できる。著者の描写は体験の瞬間を豊かに捉えているが、ものや場の媒介性が理論的に位置づけられれば、「彩色の精神」はより動態的で厚みある概念となっただろう。感情は身体と環境、偶然と秩序、金銭

とモノのあいだで交差しながら立ち上がる経験である。この点から見れば、賭博実践における「情動の生成」は、単に感覚の高揚を意味するのではなく、人と世界とのあいだに開かれる関係そのものとして理解することができる。

3点目は、「賭博者のな生」の概念が魅力的である一方、その普遍化に危うさをはらむ点である。終章で著者は、賭博者を「現実の至高性」に身を投じ、世界との関係を織り直す存在として提示するが、この議論はしばしば社会的・歴史的文脈から離れ、人間存在の根源的あり方へと抽象化されていく傾向がある。「彩色の精神」は近代合理主義への批判的視座として有効だが、それが賭博を普遍的な「生の様式」へと引き上げるとき、ミンダナオに生きる人々の宗教・階層・ジェンダー・地域性といった差異が後景化する。ビーリ (Biehl) [2013] が指摘するように、「生 (life)」を抽象的思考対象へと引き上げるとき、人々の特異な形や関係、政治的条件は平板化される危険がある。彼の「live forms (生きられる形)」という概念は抽象化を拒み、具体的世界のなかで生を形づくる運動に注目するよう促す。この点からすれば、著者の「賭博者のな生」もまた、普遍的な生の詩学として読むよりは、社会的・歴史的条件のもとで形づけられる具体的な生の一形態として再定位する余地があるだろう。賭博の経験を人間存在の根源的比喩として読む誘惑は強い。しかし、その魅力ゆえにこそ、具体的な社会性を見失う危険がある。本書の強度は、むしろそのような普遍化の先にはな

く、人々の賭けの瞬間ごとに現れる、異なる世界の輝きにこそ宿っているのではないか。

本書は、賭博という一見「逸脱的」とみなされがちな営みを、人間が世界と接続する実践として描いた力作である。著者は、闘鶏と数字くじを往還し、人々が偶然や不確実性を通していかに生を組み立てているのかを、詩的かつ確かな民族誌的厚みで示している。

確かに、賭博における金銭の機能、情動の生成過程、「賭博者のな生」の普遍化には理論的深化の余地がある。しかし、これらもまた本書が開いた豊かな思考の射程の証左であり、むしろ本書は、賭博を通じて「生きるとはいかに世界と関わるのか」という根源的な問いを再考させる試みとして意欲的である。フィールドワークに基づく記述と現象への詩的なまなざしが融合した本書は、偶然や不確実性と向き合う人間の生を考えるためにも読むべき一冊である。

引用文献

- 箭内 匡・西井凉子. 2020. 「アフェクトゥスとは何か？」西井凉子・箭内匡編『アフェクトゥス (情動) — 一生の外側に触れる』京都大学学術出版会, 405–434.
- Biehl, J. 2013. Ethnography in the Way of Theory, *Cultural Anthropology* 28(4): 573–597.
- Massumi, B. 2002. *Parables for the Virtual: Movement, Affect, Sensation*. Durham & London: Duke University Press.